

平成 31 年 3 月 21 日

平成 30 年度 第 2 回教育課程編成委員会 報告書

日時：平成 31 年 3 月 14 日（木）13：00～14：00

場所：日本福祉教育専門学校 高田校舎

出席者：委員 松山 慎司（社会福祉法人西東京市社会福祉協議会 専門員）
委員 金川 正宗（社会福祉法人敬心福社会池袋敬心苑 施設長）
委員 肥後 義道（立川市社会福祉協議会）

教員 陶山 哲夫（学校長）
教員 白川 耕一（教務部長、社会福祉士養成科教員）
教員 中島 たまみ（ソーシャル・ケア学科 学科長）
教員 細野 真代（介護福祉学科 副学科長）
教員 有菌 暢子（社会福祉学科 学科長）
教員 中山 剛志（言語聴覚療法学科 学科長）
教員 行成 裕一郎（精神保健福祉士養成学科 学科長）
教員 片桐 正善（社会福祉士養成科 科長）
事務局 中嶋 裕之（事務次長）
事務局 浅見 豪（教務課課長代理）
事務局 鈴木 達也（学務課係長）

議題

1、学校長挨拶

冒頭に陶山校長より挨拶があった。

2、平成 31 年度 各学科の特徴的な取り組みの説明

各学科より、学生に実施した平成 30 年度授業アンケートの結果を踏まえ検討した、来年度に企業等と連携して取り組む教育について次の通り報告があった。

(1)ソーシャル・ケア学科（中島）

<授業アンケート結果について>

・アンケート項目「予習・復習の取り組み」

→学生の予習・復習に関する意識が低いという結果となった。授業中や日ごろの指導の中で、予習・復習の重要性について指導したい。

・アンケート項目「授業内で得た知識・技術が将来役に立つ内容だったか」

→学生は専門課程に入学し学ぶ内容が自分の将来に必要な知識であると認識している。

学校の授業で得た知識や技術を臨床現場で役立てていく事が出来る様、次年度は地域や関連団体と連携し、実際の現場を体験させる。

<ソーシャル・ケア学科の特徴的な取り組み>

①企業と連携した教育

- 1、地域活動を通し、地域や関係団体と連携し支援を経験する
- 2、団体や施設などと連携し、他者理解を深め、対応力や専門知識・技術の活用力を培う

②実施目的

- 1、地域で行われている活動を把握し、その関係職種等とともに支援体制のあり方を考える。
行事等の企画・運営を通し、マネジメント力やチーム力の向上を図る。
- 2、介護人材として留学生が増えている等の介護を取り巻く現状や介護利用者の国際化等が予測されることを鑑み、地域団体や実習施設から専門知識などの教授を受け、専門知識・技術の活用力、人間性と職業的倫理観に裏打ちされた対応力を培う。

③内容

- 1、地域で行われている活動(認知症カフェ、子ども食堂、ホームレス支援等)の現状を知る。
活動団体等から活動・支援体制等の情報収集をするとともに、企画運営の指導を受ける。更に企画・運営をする。
- 2、各種団体(宗教、施設等)や当事者から教授を受ける。(モスク見学、重症心身障害児者支援センター職員、NPO 団体主催者等から現状の説明や専門知識を得る)

④期待する効果

- 1、活動状況を把握する過程で、調査の必要性や方法を知る。更に状況やニーズを明確にすることで、ソーシャルマネジメント力の向上を図れるものと期待する。
活動の企画・運営を通し、マネジメント力の向上や多職種連携の必要性・重要性の理解が図れると期待する。
- 2、見学や指導を通して、専門知識・技術の活用力、介護の抱える問題発見・問題解決力、福祉の専門職として必要な、人間性と職業的倫理観に裏打ちされた対応力が培われるものと期待する。

(意見交換)

・「地域活動」の授業時間はどのくらいか (肥後)

1週間に1回、総合福祉という科目(90分通年15コマ程度)で実施するが、それだけでは不十分であるため、クラスでグループ編成し、地域活動に関する課題を明示した上で予習させる予定。(中島)

・現場の生活支援コーディネーターから指導を受けると、他職種連携や地域資源について学べるのではないか。(肥後)

・次年度は地域ソーシャルワーカーから指導を受ける予定である。(中島)

・地域支援とそれに付随する個別支援は一体化している。認知症施設や学童保育等を利用する方に対する個別支援や、8050問題に対する支援等についても学んで頂きたい。(松山)

・貴重なご意見をありがとうございました。学生指導に役立てさせていただきます。(中島)

(2)介護福祉学科(細野)

<授業アンケート結果につて>

介護福祉学科には、高卒生や留学生、職業訓練生など、様々な学生が在籍しており、どこに焦点を当てて授業を行えばいいのか、試行錯誤している段階である。

「授業の為の自己学習をおこなった」、「教員の説明が判り易かった」、「補講や使用した教材に創意工夫が感じられた」というアンケート項目について評価が悪かった。日本人や留学生に分かり易い授業を行うため、資料や授業の工夫が必要であると感じた。

<介護福祉学科の特徴的な取り組みについて>

①企業等と連携した教育

「介護の応用」

②実施目的

施設・在宅問わず様々な場面で、介護の中核的役割を果たすことが求められている介護福祉士として、マネジメントの概念の理解と実践力を身に付け将来介護の専門職として継続できる力を修得する。

外部の専門性の高い先生を呼び、オムニバス形式で展開していく。

③内容

・リスクマネジメント

高齢者施設で起こる可能性の高いリスクとその予防方法について現場では実際どのような対策を取る必要があるのかを理解する。

・ストレスマネジメント

介護職に起こりやすい心の障害を知り、介護職が取り組むストレス対策と健康管理について考える。

・ケアマネジメント

事例を元に住み慣れた家で生活をするためには、どのようなサービスの種類、頻度、支援が必要かを考えていく。

・介護予防マネジメント

音楽をツールとして、人間の身体的・精神的・社会的な能力の活性化を支援する、ブンネ・メソッドについて体験を通して理解する。

④期待する効果

マネジメント力を養い、介護のリーダーを目指す人材を育成する。

- ・誰に対してのマネジメントなのか（自分自身なのか、利用者に対してなのか）が明確ではないため軸がぶれてしまっているところもある。到達点や目標を明確にし、内容を見直す必要があると考える。

（意見交換）

- ・留学生が増加しているが、現在の状況を教えていただきたい。（金川）

→前期は日本語レベルの問題等により授業についていけない留学生が多かったが、日本語教員による指導により、後期からは授業についていけるようになり、成績が向上する留学生もいた。留学生だから出来ないというわけではない。（細野）

- ・介護の仕事はストレスが多い。ストレスマネジメントの授業は有効と考えるが、授業はどのタイミングで行っているか。（肥後）

→学生は2年次に「介護の応用」の中で15コマ程度、リスクマネジメント・ストレスマネジメント・ケアマネジメントについて学ぶ。（細野）

- ・労働衛生管理の視点からも、ストレスマネジメントを学ぶことは重要である。自分自身のマネジメントを確立出来るような授業を実施して頂きたい。（松山）

(3)社会福祉学科（有菌）

＜授業アンケート結果＞

社会福祉学科は社会福祉主事の養成学科であり、音楽療法コースと手話通訳コースに分かれている。学生は社会福祉主事の科目の他に、各コースの科目についても学んでいく。

アンケート結果を見ると「学生の自己学習」が低い結果となっているが、社会福祉系の授業と選択コースの授業で学習意欲に差が出ている。

社会福祉系の授業は座学が中心であり、自己学習意欲がわからない学生が多く見受けられる。手話コース・音楽コースについては成果がすぐに出にくいいため、モチベーションを保つことが困難なようだ。

来年度は学生のモチベーションを保たせるため、双方向による授業を展開したい。

<社会福祉学科の特徴的な取り組みについて>

①企業等連携した教育

- 1) 音楽療法実習（一部）
- 2) 出張コンサート

②実施目的

現場のニーズを肌で感じながら、対象者の役に立ち、喜ばれる音楽活動を実施できるようになる。

③内容

- 1) 提携先福祉施設等にて、教員（または非常勤講師）と学生による1時間程度の音楽活動を提供する。2年次は学生中心で活動を計画・準備・実施。提携先施設は特別養護老人ホーム・高齢者在宅サービスセンター・障害者支援施設・精神障害者自立支援施設・障害児施設・障害児親の会など11ヶ所。（音楽療法実習は、従来どおり施設謝礼金を支払って施設の指導者に委託している形態もある。）
- 2) 2カ所の提携施設にて、「アンサンブル」の授業で計画・準備したコンサートを実施予定。

④期待する効果

- ・在学中よりプロフェッショナルとしての責任と自覚を持って実践に臨む姿勢を身につけることができる。（主体的に実践に臨み、休み時間や放課後に熱心に準備する努力をする。）
- ・卒業後に現場で即実践できる力を身につけることができる。
- ・提携先施設に就職し実践を続けることで、音楽療法を実施する現場を増やすことにも繋がる。

（委員からのご意見）

- ・グループワークは多く取り入れているか（肥後）
→社会福祉主事系の授業で多く取り入れている。グループの中で自然と役割分担ができ、効果的である。（有菌）
- ・自己学習の方法について指導しているか（肥後）
→勉強の仕方が判らない学生に対しては個別にアドバイスしているものの、全体に対する講義形式での指導は行っていない。（有菌）

(4)言語聴覚療法学科（中山）

<アンケート結果について>

教育内容が高度であるため、学生が積極的に自己学習に取り組み、何とか理解しているような状況であると解釈している。

<言語聴覚療法学科の特徴的な取り組みについて>

①企業等と連携した教育

1年次：保育園実習（1週間）、病院見学（1日）

2年次：臨床実習

②実施目的

1年次

- ・保育園実習：乳幼児の発達過程を理解する。保育士の役割を理解する。
- ・病院見学：医療機関で勤務するにあたり必要な臨床能力とは何かを理解する。

2年次

・臨床実習：養成校指定規則に則った臨床実習を実施する。言語聴覚士として必要な臨床能力を身につける。

③内容

1年次

- ・保育園実習：夏期休暇期間中に新宿・豊島区の保育園に学生2名一組で訪問、園長の指導下で保育業務の補助を行いながら、乳幼児の発達段階の観察・記録を行う。
- ・病院見学：3月中に近郊の病院に学生2~4名一組（教員が引率の場合もあり）で訪問、現場の言語聴覚士の指導下で言語聴覚療法業務の見学を行いながら、言語聴覚士の業務の観察・記録を行う。

2年次

・臨床実習：8~12月のうち、12~14週間、各地の医療施設等に学生が配置、現場の言語聴覚士の指揮下で言語聴覚療法業務の見学および担当患者の評価・訓練等の補助を行いながら、言語聴覚療法業務に関する記録を行う。

④期待する効果

- ・知識の側面：暗記レベルの学習内容を体験的な学習によって理解レベルに変容させる。
- ・技能の側面：学校での演習だけでは不十分な評価・訓練技能の獲得を体験的な学習からより確実なものに変容させる。
- ・態度の側面：学校での態度教育だけでは不十分な臨床家としての適切な態度の獲得を体験的な学習からより確実なものに変容させる。

(意見交換)

・実習先の確保

→卒業生が多く、各教員のつながりのなかで実習地の確保を行っている。

・実習での経験は非常に重要であるため、学生が臨床の現場に触れる機会を多く提供して頂きたい。(金川)

・保育園実習では、子どもの正常発達について実際にコミュニケーションをとる中で理解させたいという思いから、実施している。(中山)

(5)精神保健福祉士養成学科、養成科(行成)

学科長不在のため、事務局にて説明を行った。

<精神保健福祉士養成学科、養成科の特徴的な取り組みについて>

①企業等と連携して行う授業

タイトル 精神科病院・クリニック・就労支援施設・地域活動支援センター職員による
特別講義

(目的)

学生が、主に実習または就職をする機関についての概要を理解する。

(内容)

各機関の職員より、職場の概要・職種(精神保健福祉士)の役割等の講義を行い、学生は後日、レポートにまとめる。

(期待される効果)

実習・就職に向けての職業理解の向上に効果があると規定される。

②双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業

タイトル 身体拘束ゼロに取り組む実践者の特別講義

(目的)

現在の精神保健福祉領域の課題についての考察

(内容)

身体的拘束の現状と課題について、身体的拘束の課題に取り組み続けている大学教員を招き、講義・討論を行う。

(期待される効果)

学生が、権利擁護の視点をもって、実習・就職活動・就労に取り組める効果を期待している。

③実務家教員や実務家による授業

タイトル 先輩PSWより「実習に向けて」

(目的)

実習・就職に向けての学生の動機付け

(内容)

講師より、精神保健福祉士を目指した動機・職場の紹介・専門職として求められる姿勢や大事に思っていることを講義いただく。

(期待される効果)

実習に向けた動機付けに加え、職業選択の動機の再確認をすること。

各学生の目指すべき「精神保健福祉士」のモデル構築に寄与することが期待される。

(意見交換)

夜間部はスケジュールが非常にタイトであるが、病院と施設の2か所で行う合計210時間の実習を行うにあたり、どのような工夫をしているのか(肥後)

→卒業生が管理職や施設長となっている施設が増加しており、本校の事業をご理解頂いた上で実習を受け入れてくれている。そのため、実習の実施時期や実習スケジュール等、柔軟にご対応頂いている。(事務局)

(6)社会福祉士養成学科(秋山)

学科概要について

社会福祉士養成学科は社会福祉士を養成する1年制の学科であり、学生の年齢は22~60歳(平均30歳)。学生は「大卒」「早期退職者」「主婦」「転職希望者」の4つの層に分かれている。

<アンケート結果について>

・上記のような層の学生がいる中、「学生に対し公平に接していた」や、「質問に対して真摯に対応していた」というアンケート項目が高評価であった。

・「予習・復習」や「授業の理解が出来た」というアンケート項目については3点第と低かったが、本校の国家試験合格率は毎年高水準をキープしており、アンケート結果は低かったものの授業が理解できていないという事ではなかったと考える。

<社会福祉士養成学科の特徴的な取り組みについて>

①企業等と連携して行う授業

タイトル：特別講師招聘による講義

(目的)

- ・社会福祉実践現場の理解
- ・就職や実習に向けての事前学習
- ・社会福祉士としての職業倫理等をより実践的に理解する

(内容)

- ・特別講師として社会福祉実践現場実践を行なう企業等を招聘し、講義形式で学ぶ。
- ・講義後、レポートを作成する。
- ・後日、見学会等を行い実際に理解が深める。

(期待される効果)

- ・実習や就職に向けての職場、職種理解
- ・社会福祉士像の構築（専門性の理解）

② 双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業

タイトル：実践力の養成

(目的)

- ・ソーシャルワーク実践の総合的・包括的理解
- ・ソーシャルワークにおける応用力や専門性の習得
- ・相談援助実習の事前・事後学習

(内容)

- ・相談援助実践の価値・知識・技術を具体的な演習課題を通して学ぶ。

(期待される効果)

- ・実習における学習活動の促進
- ・対人援助現場における基礎力の養成

③ 実務家教員や実務家による授業

タイトル：実践現場の理解とロールモデルの提供

(目的)

- ・相談援助現場について、実際に理解をする。
- ・相談援助現場における社会福祉士として求められる資質、技能について具体的に理解ができる。

(内容)

- ・具体的な事例等の提供
- ・授業中に展開される社会福祉士としての実践報告

(期待される効果)

- ・社会福祉士像の構築
- ・職業・職種理解

④ 実地での体験活動を伴う授業

タイトル：施設見学ならびにボランティア体験

(目的)

- ・支援の現場から学びを得る。

(内容)

- ・施設見学：特別養護老人ホーム「杜の風上原」、救護施設
 - ・ボランティア体験：児童養護施設「こどもの家 八栄寮」、障害者支援施設「白根学園」
- (期待される効果)
- ・実習における学習の促進
 - ・職業・職種理解

(意見交換)

- ・学生の就職先について教えてください。(肥後)
- 行政や病院、社会福祉協議会が全体の 50%を占めている。その他高齢分野や障害分野となっている。最近では医療ソーシャルワーカーや社会福祉協議会、地域包括支援センターを希望する学生が増加傾向にある。(秋山)
- ・社会福祉士養成学科を卒業後、精神保健福祉士の資格取得を目指す学生はいるか(肥後)
- 毎年 1 割くらいの学生が本校の精神保健福祉士養成通信課程に入学している。(秋山)

(7)社会福祉士養成科 (片桐)

<アンケート結果について>

「予習・復習」や「授業の理解ができた」というアンケート項目が低評価となったが、夜間部は年間スケジュールが非常にタイトであり、アンケートを実施した 7 月は、予習復習や授業の理解というよりも、とにかく毎日学校に来授業を受け、社会福祉に関する知識を詰め込む時期であることから、この結果は仕方がないと考える。

その他の項目については概ね高評価となっており、安堵している。

<社会福祉士養成科の特徴的な取り組みについて>

①企業等と連携して行う授業

タイトル 社会福祉における地域での企業等の役割を知る

(目的)

社会福祉における契約制度を中心とした構造改革が完結しつつある現在、「福祉サービス関係者等」(社会福祉及び介護福祉法)が、地域で担っている具体的な役割を理解する。

(内容)

40 年前の地域サークルを淵源とし、現在、地域の障害者福祉を担う NPO 団体と連携し、「相談援助実習指導」において、地域での NPO の役割を話してもらうとともに、随時 NPO の現場見学を受け入れてもらう

(期待される効果)

その団体の40年の歴史は社会福祉制度の変遷の歴史と重なるため、小さなボランティア団体がいかに地域や制度と関係しながら生き残っているかを具体的に知ることで、「行政か企業か」という二項対立を超えた、社会福祉そのものの具体的役割を知る。

②双方向又は多方向に行われる討論を伴う授業

タイトル 生活様式の多様化に相對する社会福祉の有り様を問う

(目的)

第三次産業化が急速に進むにつれ生活様式はかつてないほど多様化しているが、それら多様性を肯定しつつも社会秩序を維持するために社会福祉に何ができるか、社会人クラスとして、それぞれ経験してきた生活様式の有り様を踏まえ、再検討する。

(内容)

「相談援助演習」において、学生それぞれの生活様式の違いを具体的に理解できるような討論を行い、それらを包含する社会福祉が具体的にどのようにありうるかについて、全員でディスカッションができるよう、グループワークを積極的に取り入れる。

(期待される効果)

同じ「社会人」という括りで入学したものの、自分と異なる多様な生活様式がそれぞれにあることを理解することで、現場に出た際に、社会福祉がいわゆる弱者救済のための制度ではなく、自分の生活と直結したものとして見られるようになる。

③実務家教員や実務家による授業

タイトル 社会福祉を業とし生きることのロールモデルの提供

(目的)

ほとんどの学生が入学前にはいわゆる制度上の社会福祉を職とした経験がないため、社会福祉を業とし生きることについて、理念的に過ぎ、具体的像が描けないものが多い。そのため、社会福祉実践を行ってきた教員を複数そろえ、そのロールモデルとする。

(内容)

先の「相談援助演習」は8割、各講義科目でも社会福祉実務に直結する科目に関しては5割以上を社会福祉実務経験者とする。

(期待される効果)

キャリアある社会人の多い当養成科では、複数の社会福祉実務経験教員をそろえることで、多くの学生が自分の社会人キャリアと対比したうえで、社会福祉業界で生きていくことが具体的像をもってイメージできることが期待される。

④実地での体験活動を伴う授業

タイトル 社会福祉の理念と具体的実践を埋めるための工夫の創造

(目的)

社会福祉経験なき学生の多い当養成科では、社会福祉への理念が頭の中で肥大している学生が少なくないため、理念とそれを目指す実践のズレを具体的に実感してもらおうとともに、そのズレを埋める創意工夫こそが社会福祉であることを知る。

(内容)

180 時間の「相談援助演習」を行い、その過程で、全学生に専任教員を担当者として割り振り、個別指導を行う。

(期待される効果)

理念を実践にうつすことが現状の社会においてはいかに困難なことであるかを具体的に知ることができるとともに、それを埋めるために社会科学的な視点に意義を理解できるようになることが期待される。

(意見交換)

・学生の年齢層を教えてください。(肥後)

→昼間部に比べると 30, 40 代が多い。区切りの年に自分の仕事を見つめ直す方が多いようだ。(片桐)

・トワイライト、ナイトコースがあるが、実習はうまく実施出来ているか(肥後)

→卒業生が施設長になっている施設が増加しており、本校の事情をご理解頂いた上で実習を受け入れてくれている。(片桐)

4、おわりに

来年度 1 回目の委員会は、6 月下旬の開催を予定している。